

或る夏の日に

-----或る夏の日、突然いなくなった君の姿を今日も思い出す。
虚空に次々と星が光輝く度に「これは夢なんじゃないか」
と逃げ出したくなる。あの日の約束とあの日の後悔に今
尚、押しつぶされそうになる。もしあの日々が戻るなら、
僕は、なんだってできるのに...

夏の気^{あつ}怠さも消えるほどに淡く綺麗な君の髪に
ただ触れていたいだけなのに
季節^{じかいん}とは何て儚く不平等なんでしょう

嗚呼、記憶の中で 唯、笑ってるだけ
唯、笑ってるだけ
嗚呼、記憶の中で 唯、泣いているだけ
唯、泣いているだけ

過ぎ去った欠片^{かこ}を拾い集めて
生きる意味を探してみたり
そんなことで気を紛らわせたり

夏の気^{あつ}怠さも消えるほどに淡く綺麗な君の髪に
ただ触れていたいだけなのに
季節^{じかいん}とは何て儚く不平等なんでしょう

嗚呼、記憶の中で 未だ、笑ってるだけ
未だ、笑ってるだけ
嗚呼、記憶の中で 未だ、泣いているだけ
未だ、泣いているだけ

砂浜で見たあの夕陽さえも
一緒に解いたあの謎掛けさえも
短冊に書いたあの願い事も
望遠鏡で見た二重^{アルビレオ}星さえも
そんなことが 総^{みな}、幻だったり

君はもう遠い彼方の冥^く界
諦めるにはまだ早すぎてさ
天^{そら}を掴もうとしたのだ

夏の気^{あつ}怠さも消えるほどに淡く綺麗な君の髪に

夏の気^{あつ}怠さも消えるほどに淡く綺麗な君の髪に
ただ触れていたいだけなのに
季節^{じかいん}とは何て儚く不平等なんでしょう

或る夏の日に